

# 北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.21

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 第5回北陸大学読書感想文コンクール  
表彰式挨拶

北野 与一  
(ライブラリーセンター長)

⇒ 読書感想文コンクールの審査を終えて

櫻田 芳樹  
(審査委員長・教育能力開発センター教授)

⇒ 最優秀賞  
『仮面の告白』を読んで

出島 一茂  
(法学部 法律学科 3年次生)

⇒ 優秀賞  
『プラナリア』を読んで

宮野 なつ美  
(法学部 法律学科 3年次生)

⇒ 優秀賞  
天安門事件についての思考

劉 宝君  
(未来創造学部 未来社会創造学科 2年次生)

⇒ 優秀賞  
異文化体験から読んだ『走れメロス』

小嶋 優子  
(未来創造学部 未来社会創造学科 2年次生)

⇒ 審査委員から一言

⇒ Inside Web 利用案内

⇒ 目次

# HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報  
1st-Half 2006



第5回 北陸大学読書感想文コンクール

## 入賞者を表彰

### 表彰式挨拶

ライブラリーセンター長 北野 与一

第5回読書感想文コンクールで入賞された皆さん、本当におめでとうございます。

このコンクールには、76編の作品の応募があり、栄冠を手にした皆さんは、それを誇りに思い、これからも読書に励み、知力と思考力、表現力や作文力を高め、ひいては人間力を一層豊かにしていられるよう希望致します。『書経』の中に「学ばざれば牆<sup>かき</sup>に面す」という言葉があります。「学問をしなければ、塀に向かって立ったようで、前方が見えず進むことができない」という意であり、私たち人間は、一生学び続けなければならない動物なのであって、人間形成という目標に向かって研さんを積んでいかなければならない。この研さんには、読書が最適であり、作者という他者と語り合って自己を磨いていってほしいものです。

入賞者に対し、主催者を代表して心から敬意を表しますとともに、「夢と希望」をもって来年度もまた、応募され、栄冠を勝ちとるよう切に希望致します。

なお、作品の選考に当たられた櫻田審査委員長を初め、各審査委員の方々に大変ご苦勞をおかけ致し、この場を借りて感謝とお礼を申し上げます。

終わりに、最優秀賞と優秀賞に輝いた作品は、本学の「ライブラリーセンター報」(No.21)に掲載し、全学に公開する予定であります。

簡単ではありますが、お祝いとお礼の言葉と致します。



入賞者の皆さん (平成18年1月18日の表彰式にて)

## 読書感想文コンクールの審査を終えて

審査委員長・教育能力開発センター教授 櫻田 芳樹

今回のコンクールでは、76編の応募があり、最優秀作を含む4編の優秀作と7編の佳作を選びました。以下に短評を記します。

最優秀作『『仮面の告白』を読んで』は、自己表現の手段として、「演じる」仮面生活から自己の素顔を意識化していく心理的移行過程を見事にとら捉えており、筆者は、自身の素顔へ迫る機会を与えてくれたとして、自分を見つめ直し、人間力を向上させようとしています。

優秀作の『『プラナリア』を読んで』は、がん患者の心境を知ろうとして、他人の経験や心の中を理解することの難しさに気付いたと述べています。そこで筆者は、理解の困難性から生ずる違和感を「分かりあおう」という行動と努力で乗り越えなければならないと主張しています。

「天安門事件についての思考」は、筆者が『天安門燃ゆ』を読んで、自分の感想と著者内容とをダブラかせながら述べたものでありますが、それらを日本語でよくまとめており、日本語の用法など高く評価されました。

「異文化体験から読んだ『走れメロス』」は、異文化地域で心を広くもち、物事に余りこだわらないで生活してきた筆者が、自国に帰り生活面で違和感を感じました。そのことがきっかけとなり、人間関係における信頼や信義の大切さについて、深く考えるようになったと述べています。

最後に、選考に当たって嬉しかった点や注意を促しておきたい点を少し述べてみます。

嬉しかった点は、投稿作品の多くに、読書によって読者自身の人間力を向上させようとする姿勢が垣間見られたことであります。

注意点の一つは、盗作問題です。われわれは、他人の公表作品を自分の作品として絶対に公表してはいけません。厳に注意を。二つ目は、引用問題です。他人の公表作品の一部を引用したい場合には、引用箇所を括弧(「」)で結んで、併せてその出典等を明らかにした上で引用してください。以上二点について、とくと注意し、研さんを積み、次回も応募を。

### 入賞作品

 <b>最優秀賞</b>	『仮面の告白』を読んで	出島 一茂 (法学部 法律学科 3年次生)
 <b>優秀賞</b>	『プラナリア』を読んで 天安門事件についての思考 異文化体験から読んだ『走れメロス』	宮野なつ美 (法学部 法律学科 3年次生) 劉 宝君 (未来創造学部 未来社会創造学科 2年次生) 小嶋 優子 (未来創造学部 未来社会創造学科 2年次生)
 <b>佳作</b>	津田梅子 翻訳の面白さ—異文化の体験 江原啓之さんの本を読んで 『ある通商国家の興亡』を読んで 人間って素晴らしい 『君たちの生きる社会』を読んで 『ある通商国家の興亡』を読んで	北口 景子 (法学部 法律学科 3年次生) 瀋 向琮 (法学部 法律学科 3年次生) 谷内 佑起 (未来創造学部 未来社会創造学科 2年次生) 山田 慧也 (未来創造学部 未来社会創造学科 2年次生) 山本 実枝 (未来創造学部 未来社会創造学科 2年次生) 出越 菜摘 (未来創造学部 未来社会創造学科 2年次生) 二橋 環 (未来創造学部 未来社会創造学科 1年次生)

(学年は平成17年度のもの)

最優秀賞

## 『仮面の告白』を読んで

著者 三島 由紀夫

出版社 講談社

出島 一茂

(法学部 法律学科 3年次生)



三島由紀夫（本名／平岡公威）は、言わずと知れた日本を代表する作家である。今回、彼の初期代表作である『仮面の告白』を手にとってみた。この作品は、主人公である「私」（三島自身）の性の告白を、いかにも三島らしい日本語の美に則<sup>のっと</sup>ったレトリックを用いて展開していく。

“人の目に私の演技と映るものが私にとっては本質に還らうといふ要求の現はれであり、人の目に自然な私と映るものこそ私の演技であるといふメカニズムを、このころからおぼろげに私は理解しはじめてみた”

幼年時代の特異な家庭環境を背景に、意識化という装置を上手く調節出来ず、すべてを意識しすぎてしまうが故に、「演じる」つまり仮面を被り生活することで、自己を保っていくことが出来ると意識していた。だからこそ、「演技」、「扮装欲」に誘惑、翻弄<sup>ほんろう</sup>され、手に入れた仮面をずっと弄<sup>もてあそ</sup>んでしまった。長ずるに及んで、仮面はゆっくりと、しかし確実に素顔へ食い込んでゆき、いつしか演技の中でしか生きられなくなっていることに気づいたとき、初めて自己の素顔というものの存在が三島本人の中に意識されてきたのであろう。

こうして「素顔」と「仮面」との間に生じたジレンマに対して作者、つまり自分に自信が持てない“引込思案で、何かいふとすぐに顔を赤らめ、しかも女にちやほやされるほどの容貌の自信がなく、いきほひ書物ばかりかじりついてある”平岡公威が、何か揺ぎ無い地盤<sup>ある</sup>に立った、或いは、地盤を見出した「三島由紀夫」という、自信に満ちあふれた作家の仮面を被って行われた、自己回復(自殺)的行為が見事に遂行される。

しかし三島は作中で自己の本質的な素顔を決して晒<sup>さら</sup>したりはしていない。「私」から語られる「素顔」と呼ぶべきものでさえも巧みに彼の被る仮面へと仕立て上げられ、あるべき素顔の痕跡を見事に消し去っている。と同時に、生まれ変わった三島由紀夫という「仮面」を「素顔」に据えている。つまり、彼は、はっきりと自己の素顔というものを意識化しているのである。

この作品を読み終えたとき、私は、彼の素顔へ確実に迫っていたつもりが、その実、彼の姿を映し出している鏡をただ茫然<sup>ぼうぜん</sup>と眺めさせられている存在にしか過ぎなかった。まんまと三島由紀夫の描く、緻密な復活劇のシナリオに予定された一人の存在(演者)へと仕立て上げられてしまっていたのである。と同時に、私自身が通過してきた思春期を思い出さずにはいられない気持ちになってきた。私もまた「他人にとって自分はどうか見られているのか？」ということばかりに囚<sup>とら</sup>われ、「こう見られていたい自分」例えば、「快活な人」であるように「演技」を重ね、素顔が抱いていた憂いを忘れていた一人である。私自身「演技」を行うたびに、“自分は幸福なのだろうか、これでも陽気なのか、という疑問”、他人と接する際に、“どこ

かわざとらしい・人工的な・疲れやすいもの”、そして自己の内面に対し、“本然のものをいつはつてあるといふ後ろめたさ”が幾度となく感じられていたはずである。

しかし、こうした自己の素顔に迫る機会があったにもかかわらず、結局今日に至るまで見て見ぬふりをして、うやむやにしてきた。私には自信が無かったのだ。だからこそ素直に三島由紀夫を羨ましく思う。彼にはどんな形であれ、私が求めてやまない内面と向き合えるだけの確かな自信が備わっていたのである。

この先、私にとっての復活劇が行われるかどうかは、私に係る「運命の献立表」のみぞ知ることである。ただ、この作品が私に一つの方法論を示し、私自身の素顔へ迫る機会を再び提供してくれたことで、私の中で今までとは違う何かが、ゆっくりと、しかし確実に動き始めた気がする。

### 最優秀賞を受賞して

今回の受賞を大変光栄に思います。これを機会に、今後更に、自分の興味関心及び大学での勉強等に関連した、様々なジャンルの本に触れていき、物事を広い視野で見つめる力を養っていきたいと思います。

### 平成18年度学術資料委員紹介

大西 邦治	学術資料部長・読書感想文審査委員	教育能力開発センター教授
藤井 洋一	紀要編集委員長	薬学部教授
渡辺 寛	紀要編集委員	未来創造学部教授
轟 里香	紀要編集委員	教育能力開発センター助教授
櫻田 芳樹	読書感想文審査委員長	教育能力開発センター教授
大楽 光江	読書感想文審査委員	未来創造学部教授
山本 千夏	読書感想文審査委員	薬学部助教授



優秀賞

## 『プラナリア』を読んで

著者 山本 文緒

出版社 文藝春秋

宮野 なつ美

(法学部 法律学科 3年次生)



私は何故、本を読むのだろうか。それは、私の知らない世界を知ることができるからだ。本を読むことで、私がまだ見たことのない世界や、私の目ではこれからも見ることはないであろう世界を見ることができるからだ。

この『プラナリア』を手にしたのも、私の知らない世界を知りたかったからだ。それは、がんになった人の世界だ。私が、がん患者の気持ちを知りたいと思ったのは、最近、私の知人で、がんになった人がいるからだ。その人は、きっとものすごく辛い、痛い、大変な思いをしているだろうに、まわりの人にそのようなところを一切見せないようにしている。だからこそ、その人の気持ちを少しでも理解したいと思ったからだ。

『プラナリア』は、一昨年、二十四の誕生日を迎える一か月前に乳がんで右胸を取り、何もかもが面倒くさくなり、会社を辞め、今は月に一度、病院に通っているだけの主人公・上原春香の話だ。

春香は、「切っても切っても死なないから」、「次に生まれてくる時はプラナリアに。」と考えている。「次に生まれてくる時は何になりたいと思いますか?」と聞かれて、「鳥」や「猫」や「スーパーモデル」と答える人はいても、こう答える人はいないだろう。失った右胸や転移や死への恐怖が春香にそう思わせるのだ。春香の答えに皆、「分かるような気がするなあ。」、「少し分かるわ。」と言い、見当違いの意見を述べ、ずれた同感を表す。また、まだ転移の心配もあるし、今も月に一度、ホルモン注射を打って、それによってめまいや吐き気がするのに、皆、「終わったことなんだから忘れる」と言う。確かに、手術も終わり、もう退院している。しかし、春香にとっては、「全然終わったことじゃない」のだ。ここにもまた、春香とまわりの人との間には違和感がある。

『プラナリア』を読んでいて気になったのは、春香とまわりの人の間にこのように多くの違和感があることだ。初めは、これは、がん患者の気持ちをがん患者でないまわりの人が理解することは難しいからだと思っていた。話題ががんだから、多くの違和感が生じるのだと思った。けれども、それは違うような気がしてきた。

普段、私たちがする会話のなかでも違和感を覚えることはある。話題が何であっても、相手が誰であっても、違和感を覚えることはある。それは、自分の言いたいことを上手く言葉にできないからというもの一つの原因だ。しかし、それ以上に、自分と相手が全く同じことを考えたり、感じたりすることはできないということが原因にあると思う。私たちは相手と全く同じことを共有することはできないのだ。だから、私が、がんになった知人のことを理解したいと思い、考え、結論を出したとしても、その答えが知人の考えと同じでなかったら、そこに違和感が生じる。それは、がんだから分からないのでもなく、私の考えが

間違っているのでもなく、また、知人の考えが間違っているのでもない。むしろ、違和感を覚えるのは当然のことなのだ。つまり、「まったく違和感を感じない他人などこの世に存在するわけがない」のだ。だから、分からない、分かりあえないからといって、「へこんではいけない」のだ。

そう思いながらも春香は最後に、分かりあおうとする人たちを皆、拒絶してしまった。たとえ分かりあえなくても、拒絶してはならない。拒絶してしまうとすべてが終わってしまう。「少くく違和感があっ」たって、私たちはうまくやっていけるはずなのだ。大切なのは、分かりあえなくても、分かりあおうとすることなのだ。分かりあおうとしてくれる人がいたら、できるだけお互いに歩み寄ることが大切なのだ。

私は、知人の気持ちを完全に理解することはできない。また、がん患者の気持ちを完全に理解することもできない。しかし、気持ちを理解しようとすることはできる。本を読んだり、様々な人の話を聞いたり、インターネットで調べたりすることで、知らない世界に少しでも近づくことはできる。完全に理解できないとしても、理解しようとする努力は決して無駄ではない。理解しようとする気持ちが大切なのだ。

### 優秀賞を受賞して

受賞に対してお礼申し上げます。このような賞を受賞することができ、大変嬉しく思っています。読書をするにより、自分の知らない世界を知ることができます。これからも読書を通して、さらに広い世界を見ていきたいです。また、そうして得たことを文章で上手く表現できるように努力していきます。

## 平成17年度中、ライブラリーセンター図書の利用が多かった学生の皆さんです。(学籍番号順)

薬学部			未来創造学部			外国語学部			法学部		
磯	貴子	長岡 正大	劉	宝君	松山	梨恵	呉	松花	瀋	陽	
山本	恵子	川端豊慈樹	本多	淳一	山下	美紀	修	建華	劉	茜	
渡邊	仁美		葉	琳琳	渡邊	義宏	郭	森			
塩見	直子		王	曄	趙	明月	許	慧玲			

☆多くのご利用ありがとうございました。平成18年度も学生の皆さんのより一層のご利用を期待しております。

優秀賞

## 天安門事件についての思考

書名 『天安門燃ゆ』  
 著者 読売新聞社中国特派員団  
 出版社 読売新聞社

劉 宝君

(未来創造学部 未来社会創造学科  
2年次生)



歴史の事実の一つだけである。しかし、政治、教育、人生観などに拘束されて同一の事件に対していろいろな評価をもっている。天安門事件の評価について、私はそう考えている。

1989年は、中国の歴史の中で並みの一年ではなかった。天安門事件が起きて、中国民主化運動のピークになった。これ以前にも、何度も学生運動が行われたが、天安門事件とまったく違う性質である。1919年の五・四運動から1949年までの間に行われた学生運動は、ほとんど中国共産党の指導の下で、国家統一や民族解放のための愛国運動であり、天安門事件は、中国共産党の統治に反対する暴動で、中国の政府に鎮圧された事件である。その事件の性質は言いがたい。1989年以来、国外だけでなく、国内にもいろいろな評価がある。その運動はといった民主化の学生運動か、人に利用された学生動乱か、それとも反共的な革命か、今までも統一した見方がない。天安門事件は中国の近代に起きた重大な政治事件であり、それに対する評価が反共的な場合は、災厄を招く恐れも考えられる。したがって、事件が発生して15年経った後の今日でも、その事件について、あたかも天安門に垂れ下がっている蜂の巣のように、中国の指導者は遠く避けて触れないようにする。

天安門事件が起きたとき、私はまだ中学生の時代であった。事件について、先生が学校でおっしゃったことをそのまま覚えており、家に戻ると、新聞やニュース、あるいはテレビでの報道で、事件のことを知りました。私は、かつて人並みにこうした事件を学生暴動だと思い、いつも中国政府の事件に対する鎮圧が正しいと感じていた。年をとるにつれて、知識や経験が積み重なって、前にあった思いも変わりつつある。十何年前に行われた天安門事件は、本当に中国政府の言うように学生暴動であったのだろう。大学生はいつも新しい思想を持っている人間であり、自由や民主主義を実現させるため、古い習慣や封建的なやり方に挑戦して戦う人間たちである。彼らによる「暴動」とは、社会の現実に対する批判であり、改革の要求に過ぎなかったのではないか。

私は2年前に、日本に留学にきた。この、社会制度から意識形態までまったく違った国で勉強して、学んだ知識だけでなく、考え方もより成熟したと思う。あることについての評価は人によって違うかもしれないが、国籍は判断の基準に入るべきでない。今、手に持っている本を読みながら、当時の考えを思い出して、どんなに甘かったことか感じる。今の中国の社会では、官吏が法を無視して、賄賂を取って汚職することは珍しくない。ごく最近、インターネットで中国の山西省の副書記(日本の副知事にあたる人)が賄賂を受けた汚職事件で逮捕されたという記事が見られた。こんなことは中国人にとって珍しくないことである。これは一党支配の産物であると考えられる。今の中国は深刻な社会的現実にあって、国民はしみじみその苦しみを感している。社会の各種の矛盾も、より激化してきた。もちろん、十何年前の中国社会は

それほど暗くなかったはずであるが、きっと芽生えがあってこそ、当時の大学生によって天安門事件が起きたはずである。

その事件について、この15年間、中国政府はずっと「動乱」と定めて、変えたことはない。今後もしばらく変わることができないだろう。ただし、多くの人は、事件の真相は隠されたといつて、客観的に評価されていないと思っている。中国は共産党一党支配の国であり、その統治の下で、確かに経済は発展しつつあり、国民の生活も前より豊かになったが、だんだん一党支配の欠点をさらけ出してきた。なんといつても、共産党員の数は中国人口のわずか一部だけであり、十何億人にかかわる重大な決断は一党の決断次第で、国の運命はごく少ない人が握っている。だからこそ、官僚主義がはびこって、ますます深刻になる恐れがある。一方、一党支配であるから、選挙制度には瑕疵がある。国民の総意によって国の指導者などを選ぶというもの、実は退任する指導者が後任の者を選任するわけで、選挙はいわゆる飾り物で国民を欺く手段になっていないだろうか。多くの方針や政策が作られても実行できない、国民自身の利益に向いていないから。このように国民の不満が日々たまっていく。これが天安門事件を爆発させた起因であると思っている。ほかに天安門事件の真相がいったん伝われば、これが起爆剤となり、人民の不満を触発し、共産党政府に反対するエネルギーを形成するという考えを持っている人が国内にも国外にも少なくない。

この本の最後に、「私たちが言いたいのは、現在の中国共産党指導部には希望はないだろうが、中国の青年には希望があり、だから中国には希望がある、ということである。」と書いてある。確かに、中国の希望は中国の青年にある、中国の民主主義は革命を通じて実現するか？あるいは共産党の指導下で実現するか？今、はっきりした結論を得られないと思う。今の中国共産党もその深刻な社会の現実気づいて、反省すると同時に教育、法律各種の手段によって現状を変えようと努力している。そして、一定の効果をもたらしている。中国の民主主義はやはり以前よりも発展していると言える。中国が平和的に民主主義を実現するのが私の希望である。

天安門事件の真相はいずれ明らかになる。中国の青年には希望があり、だから中国には希望がある、歴史は人民が書いたものであると信じている。

## 優秀賞を受賞して

北陸大学読書感想文コンクールに応募しようとした時に、まず思ったのは、適切なテーマで、留学生である自分がうまく感想文を書けるかどうかという心配でした。

しかし、ライブラリーセンターで、テーマについての資料を探索するうちに、徐々に感想文の構想が出来上がってきました。ただ、実際に文章を書く過程においては、随分と「苦しみ」を味わいました。「苦しみ」の最たるものは、日本語として十分に自分の考えを表わせるかどうかでした。また、資料の収集段階において、テーマに関連する様々な資料を読まなければならなかったことが、大きなハードルでした。しかしながら徐々に書いていくうちに、感想文の輪郭が見えてきました。このように、自分なりの苦労を重ねて出来上がった感想文が評価され、「優秀賞」を貰うことができ、大変感謝しています。今までの苦労が報われた感じで、評価していただいた先生方に感謝申し上げます。

優秀賞

## 異文化体験から読んだ『走れメロス』

小嶋 優子

(未来創造学部 未来社会創造学科 2年次生)

著者 太宰 治

出版社 角川書店



「疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私欲のかたまりさ。信じてはならぬ。」この言葉は、人を信じることができない王がメロスに向かって発したものだ。ここにさしかかった時、私は自分自身の心の中を読まれたような気がした。私も時々だが、どこまで人の心を信じていいのかわからなくなる。メロスは言う。「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。」と。なぜここまで言い切れるのだろうか。

私が、王のように感じるようになったのは、高校生の頃からだ。私は、父の仕事の都合で中学を海外で過ごした。私たち家族が住んでいた町は中国人、韓国人、日本人、メキシコ人など現地の人間に加え、日系からラテン系まであらゆる人種が住んでいる町だった。現地の言葉を話せない私たちは、時には嫌がらせを受ける事もあったが、多くは人種が違って相手は臆することなく、目があえば平和を意味するようにお互いに微笑み合い、お店に入れば、「こんにちは、ごきげんいかがですか。」などと、日本では考えられないような挨拶<sup>あいさつ</sup>を繰り返す。また、学校では私のクラスのほとんどが中国人やメキシコ人で、休み時間は皆母国語で話しはじめてしまうが、身振り手振りや、中国人は漢字の筆記で話の内容を説明してくれるので、母国語で話せない寂しさはあるが、孤独だと感じることは多くなかった。

時は過ぎ、私は日本に帰国し、高校に編入した。やっと、母国語が通じる場所に帰ってきたと感じた。しかし、私の期待は音を立てるかのごとく崩れ落ちた。まず、私には中学時代の思い出は海外で過ごしてきた記憶しかない。周りが中学校の話をはじめたので、私も加わろうと話し始めたが、口では「へえ。そうなんだ。」などという言葉が発している中で、表情は聞くに堪えないような顔をしているように私は感じた。それからというもの、たびたび中学校の話になっても、私はただ、聞き役に回るようになった。海外では、言葉が通じない分、友達とは身振り手振りで気持ちを伝えるほか、なるべく相手を理解しようと一生懸命になることで、大概は相手の表情を見れば、気持ちはちょっとはわかるようになったと感じる。そのため、口から発せられる言葉よりもまず相手の表情を見てしまう。

私がこの話を初めて読んだのは、小学校の教科書だった。が、改めて読みなおし、メロスとセリヌンティウスがうらやましいと感じた。嫉妬さえおぼえた。何がこの二人をつないでいるのか、相手の何をそこまで信じ、命さえも預けることのできる仲にするのであろうか、と。人は生まれながらにして、悪を持っているとは思っていないが、経験を積むごとに、人は何かしらの悪を身に付けてしまう動物ではないだろうか。王がいうように、人は人を疑うことを覚え、恨みや憎むことさえある。最近では、家族間でさえ憎しみをおぼえ、殺しあうという事件が珍しくない。そんな世の中で何をあてに、何を信じていいのかわからなくなるのは当然ではないだろうか。家族同士でさえ信じきれていないのに、他人の何を信じればい

いのだろうか。そこで、私は人と一定の距離をおき、一人で行動することが多くなった。その一定の距離間に安心しきっていた。しかし、一人ゆえに、すべてにおいてやる気がなくなった。勉強においても、ファッションにおいても、何事も一人では頑張れない。お互いに教え、教えられないと人は成長できないのだ。

これを教えてくれたのは、母である。母は言った。「人を信じなくて、誰が自分を信じてくれるのか」と。運命という言葉もあるが、人を本当につなぐものは、繋いだ手、つまり信頼なのだ。信頼がなければ、この契約社会に生きている私たちは生きられないのだ。よく聞く。「人は一人では生きられないのだ」と。私にはその言葉があたりまえすぎて本当の意味を忘れてしまっていた。なにも、人は家族だけではない。社会にいれば、色々な人が存在する。中にははじめから悪意で近づいてくる人もいるだろう。しかしまた母は言う。「裏切るよりも、裏切られた方が幸せなのだ」と。裏切れば罪悪感が（あれば）ずっと尾を引くだろうが、裏切られたという悲しみは、消えることはなくてもいつかは薄れていく。だから人は生きていけるのだ。もしそうでなければ、一体何人の人が今ここで生きているだろうか。人は信じているのだ。今日の悲しみは明日の幸せになる、と。これから会社に就職すると、一人で行動するということができなくなると思った時、私はハッと気が付いた。今までの私の行動はすべて私のわがままだったのだと。血のつながりを持っていても、相手信じなければ、信じ返してはくれないし、血のつながりを持っていなくても、家族同然のように信頼しきっている人もいる。それが、メロスとセリヌンティウスである。信頼に根拠なんて存在しない。辞書の定義なんてあてにならない。現在はメロスとセリヌンティウスのような信頼は、まだ見つけていない。しかし、私は信じたいのだ。でもまだ怖い。だから人と話をするときは相手の目を見る。信じることから逃げないために。明日の幸せを見つけるために。明日を生きるために。

### 優秀賞を受賞して

私が読書感想文に取り組もうと思ったきっかけは、自分の書いた文章がどれくらいのものなのか、評価してほしいからです。が、1年生の時はずっと落選。しかし今回は優秀賞ということで、とても驚きました。評価をしてくださった先生方からは、まだまだというコメントをいただき、これからは色々な分野で通用するような文章力をつけていけるよう頑張りたいです。

### 「関川文庫」について

金沢市内の関川医院元院長、関川愛一氏ご愛蔵の図書163冊を、ご遺族の方から寄贈していただきました。主に漢方の図書が中心となっています。これらの図書は、「関川文庫」として薬学部分館に設置してあります。この文庫を多くの方が活用されるよう、願っております。



審査委員から一言

審査委員  
叶 秋男

今年度のコンクールには、昨年度を上回る応募者があり、それ自体としては喜ばしいことでしたが、応募作品の質の点では昨年を下回ったような気がします。そうした事態となった背景の一つには、少なからず応募者が自分で感想を書きたいと思う図書の選択を誤っているような面が見られました。読書は、書き手の知識に驚嘆したり、書き手の感性に共感したりすることによって、より考える力を引き出してくれます。それゆえ来年度は、応募者には、あれこれと読書をした上、もっとも感動の大きかった図書について感想文を書いて欲しいと思います。

審査委員  
竹内弘名

「人は何を思い、生きているのか」を垣間見ることのできるコンクールに参加できたことに感謝しています。若かりし頃の自分と比較しながら読む楽しみを味わうことができました。今後一層多くの学生が参加されることを希望します。

審査委員  
山本千夏

本年度は76編の応募があり、数の上では昨年度（62編）を上回り、応募して頂いた学生の皆さんならびに、ご指導して頂いた教員の皆様に感謝いたします。

最近では、多くの人が何か情報を得ようとする場合に、インターネットが手軽にしかも頻繁に使用されています。大学には学生が自由に使えるコンピュータが随所に設置され、学生は様々な情報を日常的に得ています。インターネット上では活字あるいは映像（場合によっては音）によって表現された情報があふれており、正しい日本語や常識が備わっていなければ、情報の誤解・誤用（悪用）も起こり得るのです。“自由”に使えるインターネットは、使用する個人の“責任”も付いて回るということ認識しなければなりません。

本を読むということは、他人の体験や考え方を知るよい機会です。また、インターネット上の情報に比べて、良書では正しい日本語で書かれています。本を読んで自分の感想を持ち、自分の言葉で表現することは、とても重要なことです。表現にはそれなりの技術が必要ですが、伝えたいことがあれば言葉は伝わるはず。とりあえず上手い、下手はさておき、自分の感想を文章に書いてみてはいかがでしょうか？次の最優秀賞、優秀賞はあなたかもしれません。

寄 贈 図 書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書 名	寄 贈 者
Development of the Mongolian National Style Painting “Mongol Zurag” in Brief	毛利哲郎（入試担当調査役）
内分泌薬学	佐倉直樹（薬学部教授）

# Inside Web 利用案内 (お知らせ)

- Inside Webとは、The British Libraryが提供するデータベース検索とドキュメントデリバリーが統合されたサービスです。
- データベースに収録されている文献は、BLDSC (The British Library Document Supply Centre) で所蔵されていますので、国内に所蔵のない論文を迅速に取り寄せることができます。
- 複写依頼につきましては、ライブラリーセンターで行いますので、従来どおりマイカリン等にて文献をお申し込みください。  
 なお、国内に所蔵がなく、当サービスを利用する場合は、各先生方にお問い合わせします。
- 著作権者により価格が若干異なりますが、概算費用は1件あたり、平均3,000円前後となります。



## 編集後記

『養生訓』で有名な貝原益軒に、『楽訓』という、人生の楽しみ方を記した書物があります。この中で益軒は、本を読むことを楽しみの一つとして説いています (あとの二つは、自然と旅)。読書感想文コンクールに参加するために本を読む以外に、普段からの楽しみとして、書物に親しんでくれることを願っています。ライブラリーセンターにある約21万冊の本は、皆さんに手に取って欲しい、読んで欲しいと待っています。

### CONTENTS

○第5回北陸大学読書感想文コンクール	頁
表彰式挨拶	1
○読書感想文コンクールの審査を終えて	2
○最優秀賞感想文	3
○優秀賞感想文	5
○利用頻度上位者発表	6
○審査委員から一言	11
○Inside Web 利用案内	12

### 北陸大学ライブラリーセンター報 NO.21 1st-Half 2006

平成18年6月30日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター  
 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1  
 TEL. 076-229-3021  
 FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp  
 北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印刷：カンダ印刷株式会社